

松江春次と南洋興発



Sugar King Park にたつ松江春次像

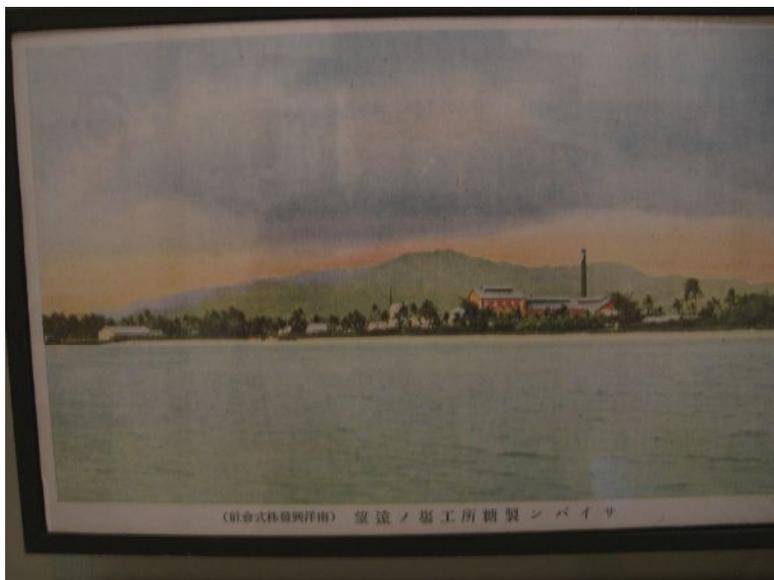
松江春次(1876－1954)は、南洋群島の繁栄を一手に担った『南洋興発株式会社』の社長を務めた人物。20代でアメリカのルイジアナ大学砂糖科を卒業、帰国後日本初の角砂糖の製造に成功した。台湾での製糖業に大きな成功を取めたが、松江は南洋群島の気候風土、土地の肥沃さが台湾よりはるかにサトウキビ栽培に適しているとの確信を持ち、1921年にサイパンに『南洋興発』を設立。資金難や病害虫などの苦難を克服し、サイパン全島にサトウキビ畑をつくり、総計5万人もの労働力入植者を島に迎え、同島における製糖事業を根付かせることに成功し『砂糖王 (Sugar King)』と呼ばれた。『南洋興発』は日本の砂糖消費量の約7割を生産し、サトウキビの刈り入れ期には、1日あたり1,200トンの砂糖を日本に輸出した。その後、南洋の他地域、ニューギニアなど外地へも事業を拡大した。

南洋興発が担った事業は、製糖事業以外にも、酒精および酒造業・鉱業・水産業・農園業・交通運輸・油脂工業・貿易業など。関連企業は20数社、社員は総勢4万8000人を抱えるまでに規模を拡大した。南洋興発の発展により、南洋群島地域の税収は急増し、1932年ごろには日本政府から財政的に独立するほどになった。南洋興発はその優れた功績から『海の満鉄』と呼ばれた。

1944年の米軍の侵攻でサイパンが灰と化した時、南洋興発のほとんどの事業施設も壊滅。終戦直前の1945年9月にはGHQ(連合軍総司令部)に即時閉鎖を命じられ、会社の歴史に幕を下ろした。



『南洋メグリ双六』南洋に移住して成功することを「あがり」とした。



チャラン・カノアにあった島最大の製糖工場（赤い建物）と そびえたつ煙突
（上下ともに CNMI 歴史博物館展示）



空襲に残った製糖工場の屋根は一部活用され、現在は高校に。(青い屋根の建物)



南洋興発事務所跡 (廃墟)



南興神社 (現在はカソリック墓地に)



南興職員用社宅



豊かなサトウキビ畑



島を1周するサトウキビ運搬列車



現存するサトウキビ列車